

三、俚 諺 集

三六二

目 録

アの部	三六三	アの部	三六三
イの部	三六四	イの部	三六四
ウの部	三六五	ウの部	三六五
エの部	三六七	エの部	三六七
オの部	〃	オの部	〃
カの部	〃	カの部	〃
キの部	三六八	キの部	三六八
クの部	三六九	クの部	三六九
ケの部	〃	ケの部	〃
コの部	〃	コの部	〃
サの部	三七〇	サの部	三七〇
シの部	三七一	シの部	三七一
スの部	三七二	スの部	三七二
セの部	〃	セの部	〃
ソの部	〃	ソの部	〃
タの部	三七三	タの部	三七三
チの部	〃	チの部	〃
ツの部	〃	ツの部	〃
テの部	三七四	テの部	三七四
トの部	〃	トの部	〃
ナ	三七五	ナ	三七五
ニ	〃	ニ	〃
ヌ	〃	ヌ	〃
ネ	三七六	ネ	三七六
ノの部	三七六	ノの部	三七六
ハの部	〃	ハの部	〃
ヒの部	三七七	ヒの部	三七七
フの部	〃	フの部	〃
ヘの部	〃	ヘの部	〃
ホの部	三七八	ホの部	三七八
マの部	〃	マの部	〃
ミの部	〃	ミの部	〃
ム	三七九	ム	三七九
メ	〃	メ	〃
モ	三八〇	モ	三八〇
ヤ	〃	ヤ	〃
ユの部	三八〇	ユの部	三八〇
ヨの部	三八一	ヨの部	三八一
ラ	〃	ラ	〃
リ	三八二	リ	三八二
ル	〃	ル	〃
レ	〃	レ	〃
ロ	〃	ロ	〃
ワ	〃	ワ	〃
井	三八三	井	三八三
エ	〃	エ	〃
ヲ	〃	ヲ	〃

「ア」の部

俚 諺 集

阿呆見たけりや、親を見よ
 明日の晩から伯母おこす
 夜便所に行く悪癖の生じたる時にいふ
 朝とんびに外行きするな、夕とんびに鎌をとげ
 朝とんびに川越するな
 朝の虹は川越するな、夕虹は蓑笠持つな
 明日は雨と思へ、人は悪人と思へ
 挨拶(仲裁人)は時の氏神
 愛して見ればあばたも暦に見ゆる
 開いた口は塞がらぬ
 赤兒の手を振るやうだ
 あかの他人
 秋風を吹かす
 秋茄子は嫁に食はずな
 秋の日の釣瓶落し

悪事千里
 悪銭身につかず
 あくぞもくぞ云ふ
 あらゆる悪口雑言をいふこと
 あげ足をとる
 朝起千兩
 旭の昇る勢
 朝曇りに傘いらす、夏の夕焼蓑作れ
 朝餉前の仕事
 足が樺木になる
 頭かくして尻かくさず
 頭禿げても浮氣は止まぬ
 味をやる
 當るも八卦當らぬも八卦
 八卦の信するに足らぬをいふ
 あて事と越中禪は向ふからはすれる
 後の祭

三六二

後の雁が先になる

後進の先輩を凌駕したるをいふ

後は野となれ山となれ

阿呆につける薬はない

鮑の片思ひ

あぶはちごらす

案ずるより生むが易い

脩をねぶらす

有難迷惑

泡をふく

青菜に鹽

蟻の熊野詣り

多人数の集れるをいふ

暑さ寒さも彼岸まで

蟻が鯛なら芋虫や鯨

「イ」の部

いきやあたりばつたり

石とんで其碁に勝たず

石橋も叩いて渡れ

石部金吉

醫者の不養生

急がば廻れ

板子一枚下は地獄

板挟みに逢ふ

一事が萬事

一升ごつくりこけても三分

一文惜みの百失ひ

一富士二鷹三茄子

一厘錢も割つて使ふ

一寸先は闇

犬と猿

犬も歩けば棒にあたる

犬の遠吠

遠ざかりおる時のみ彼は漫言すれども

近ければ言ふこと能はざる喻

犬は三日飼へば三年恩を忘れず、猫は三年養

へば三日だけ恩を知る

命あつての物種高あつての芋種

命から二番目

命しらす

命の親

命を的にかける

曰く云ひ難し

容易に説明しがたしの意

言はず語らず

言はぬは言ふにまさる

陰徳あれば陽報あり

熬豆に花

入るを計りて出づるを制す

「ウ」の部

色氣より食氣

色の白いは七難かくす

鯛の頭も信心から

石の上にも三年

従兄弟は他人のはじめ

いやいや三杯

いやな様な顔して澤山たべる

伊勢屋稻荷に犬の糞

非常に多いものを云ふ

牛馬を焼けば七代たゝる

午の日に灰かくな(火が早い)

丑の日に墓参りするな

嘘言でかためる

瓜二つ

魚の水をはなれた様

浮ぶ瀬がない

浮き助 浮き造

浮草のやう

請賣する

丑の時刻は草木も眠る

牛は牛づれ、馬は馬づれ

後髪をひかれる思ひ

後暗いことをする

牛を馬に乗りかへる

うそから出た誠

虚言をはくつもりが、識らずく誠のこ

とをいふ義

うそと坊主の頭はいふたことがない

うその皮八百

うそも方便

内辨慶の外すばまり

内股膏藥

氏より育ち

うつゝをぬかす

獨活の太木

鶴の眞似する鴉水に溺れる

噂をすればむしろしけ

上の上あり下に下あり

上を見るより下を見よ

旨いものは宵に喰へ

馬の耳に風

海千山千(海に千年山に千年)

老猪にして種々の經驗をつみ世故閱歷を盡

して人を誑すに巧なる者をいふ

生みの親より育の親

瓜につめあり瓜につめなし

瓜の蔓に茄子はならぬ

うぬぼれと梅毒氣のないものはない

「エ」の部

江戸の敵を長崎で打つ

縁は異なるもの、味なもの

蝦魚で鯛釣る

小資本を以つて大利を得んとする●諭

縁の下の力持

「オ」の部

追手に帆をあげる

負ふた子に教へられて淺瀬を渡る

女さかしうして牛賣りそこなふ

女ならでは夜が明けぬ

老いては子に従ふ

お門違ひ

奥齒に物がはさまつた様

お里が知れる

おしが強い

お茶を濁す

お茶を引く

鬼の首でも取つたやう

鬼のない間に洗濯

鬼も十八番ばん茶も出花、屁糞かづらも花盛り

おへその宿換

恩を仇で復す

親の欲目

親はなくとも子は育つ

親馬鹿

女郎買ひの尻きれ草履

鬼の目にも涙

拜み倒す

「カ」の部

可愛い子に毒食はす

可愛い子には旅をさせよ

借る時の恵比須顔返す時の閻魔顔

かつたいの梅毒恨み
かんじん要

「キ」の部

雉も鳴かすは打たれはすまい
着りや着寒い
紀州豊年米食はず
聞いて極樂見て地獄
聞くど見るとは大違ひ
狂人に及物持たした様
切つても切れぬ中
狐の七ばけ狸の八ばけ
氣は心
翠丸が上つたり下つたりする
木で鼻をくゝる
金時の火事見舞
義理と禪かゝねばならぬ

蛙の面に水

書いたものがものをいふ

籠の鳥

かすりをとる

梶を取りそこなふ

金釘流

金がうなる

金持と唾壺は溜る程きたない

顔出し出来ぬ

亀の甲より年の功

痒い所に手が届く

枯木も山の賑ひ

笠作りや蓑被る

鳥は牛笑ふ

皮引きや身痛し

河童の川流れ

蟹の念佛

木割り米つき轆轤巻き

腹の減る仕事を云ふ

「ケ」の部 「ケ」の部

糞度胸

口車に乗せられる

雲つかむ様な話

火事場泥棒

果報は寝て待て

苦しい時の神だのみ

薬より養生

ぐうの音も出ぬ

臭い物に蓋をする

腐つても鯛

薬九層倍

癖がわるい

食はすぎらひ

首が廻らぬ

雲をつくやうな男

熊野のつれ小便

鯨九十日

鯨肉の容易に腐敗せざるをいふ

下戸の肴荒し

今日か明日かの命

けちがつく

けちは凶事のこと

藝は身を助ける

怪我の功名

喧嘩するより勘定せよ

結構人は阿呆のうち

くもの子を散らすやう

「コ」の部

孝行したい時に親はなし

子を育て、親の恩を知る
木端コツバで鼻かむ

「サ」の部

細工貧乏

葬禮過ぎての醫者はなし

杯の中にポーフラがわく

酒醉本性を忘れず

さじを投げろ

鯖の生き腐れ

觸らぬ神に祟なし

觸り三百

商品などに手を觸れると三百文價值を落す

の意

三十振袖、四十島田

三十九じやもの花じやもの

猿にも衣裳

言託は武士にせよ

弘法も筆の誤り

弘法は筆をわらばす

小刀細工

心と口と違ふ

心は持ちやう

乞食が「わつば」を流したやう

小事を口やかましく騒ぐをいふ

言葉に角がたつ

言葉に税金がかゝらぬ

子供は風の子

碁に勝つて親の死目に遭へぬ

粉練三合持てば入聲するな

此の奥に眼あり

ころばぬ先の杖

ころんでも徒手では起きぬ

紺屋の明後日

猿に花、猫に小判

三杯汁に宿はなし

薩張り源助

猿も木から落ちる

先雷に雨降らす

さも似たり、葉も似たり、みやうがにしやう

がに味噌に糞

「シ」の部

自慢の糞は犬も喰はぬ

鹿の角を蜂がさす

辛棒する木(氣)に金がる

辛棒は金、臼は石

敷居が高い

四十暗り

獅子喰つた報ひ

下地は好きなり、御意はよし

下へも置かぬ

七度尋ねて人を疑へ

死錢を使ふ

死人に口なし

死ぬといふ者に死んだものなし

十人十色

十年一昔

身代を棒にふる

釋迦に説法

借金を質に置く

杓子は耳搔にならぬ

杓子定規

蛇の道はへび

朱に交れば赤くなる

四四の十六、小便シヨンクの二十

勝負は時の運

尻馬に乗る

尻くらひ観音

尻が長い

尻をさる (帳尻をこまかすを云ふ)

尻に帆かけて逃る

詩を作るより田を作れ

死花を咲かす

身代潰しの紙草履

質に置く借金もない

信心より用心

女郎買ひの破れ草履

心配すると頭が禿げる

癪のつかへに男の手

雀一寸糞ひらす

「セ」の部

千の倉より子は寶

急いては事を仕損する

小便する (破約すること)

關の山

雪隠と隠居は遠いのがよい

雪隠で貝吹く (便所で尻をひるを云ふ)

「リ」の部

底抜け騒ぎ

其の手は桑名の焼濱栗、どつこいとまつた烏賊

の金玉

損して徳とれ

總領の甚六

「そつば」と「らつば」の吹き違ひ

「ヌ」の部

雀の涙ほご

脛に疵持つ

住めば都

物事をとりちがへたるを云ふ

「タ」の部

立つて一升より坐つて五合

對岸の火事

大賢は愚の如し

大黒柱 (一家の中心となる人)

高い所へ土持

高見の見物

寶の持腐れ

たかをくゝる

章魚を釣る (人に制裁を加へるをいふ)

立板に水

伊達の薄着

狸寝入り

卵に目鼻つけた様だ

短氣は損氣

「チ」の部

地金を出す

地獄の沙汰も金次第

地震雷火事親爺

沈香もたかす屁もひらす

提灯に釣鐘

茶にする

「ツ」の部

月夜に提灯、米の飯

手足まといひ
楠木で腹きる

「ト」の部

燈臺元暗し
寅の半日降らねば曇る
豆腐にカスガヒ
年寄先來い、若い者後來い
毒のない人
年寄の冷水
問ふは一度の恥問はぬは末代の恥
遠い親類より近い他人
團栗の背比べ
鳥無き里の蝙蝠
鈍太に悪次
鳶が鷹生む
取らずの關

月夜に釜ぬかる
近穂が合はぬ
角を矯めて牛を殺す
角を折る (かむとを脱ぐ)
爪糞程 爪の垢程
爪で火をともす
面の皮が厚い
月に雨笠日に日笠

「テ」の部

亭主を尻に敷く
出す入らず
鐵砲玉の使
手八丁、口八丁
点の打ち所がない
出物腫物所嫌はず
手持無沙汰
手を引く

「ナ」の部

七儲八遣ひ
長持枕にならぬ
無い袖は振れぬ
泣いて暮すも一生笑つて暮すも一生
長し短し
泣寝入になる
泣く兒と地頭には勝てぬ
茄子と男は黒いのがよい
長い長崎、短い三輪崎

「ニ」の部

二階から目薬
二束三文
似た者夫婦
似たり寄つたり
煮ても焼いても食へぬ

「ヌ」の部

糠に釘
糠喜び
盗人にも三分の理あり
盗人をつかまへて繩
拔作 (愚者をいふ)
暖いよう鍛冶町寒いよう道下町

「ネ」の部

願つたり叶つたり
猫に鯉節
猫に小判
猫の手も借りたい程
根掘り葉掘り問ふ
寝るは極樂起さるは地獄

「ノ」の部

残り物に福がある
蚤の夫婦
乗りかゝつた船
のみと言へば錠

「ハ」の部

吐いた唾は飲めぬ
馬鹿につける薬はない

馬鹿程恐い者はない
箸のこけたのも可笑しい
裸で道中は出来ぬ
話喰ひ
鼻にかける
鼻の下が可愛い
濱の松風音ばかり
早起三文の徳
腹の皮張れば目の皮たるむ
腹八合に醫者いらす
腹八合に病なし
箸にも棒にもかゝらぬ
二十過ぎての子の意見
走るよりははふ方が早い
腹は立つても皆までいふな
花よりだんご
針の穴から天のぞく

「ヒ」の部

最負の引倒し
彼岸過ぎての麥の肥
人の噂も七十五日
人の口に戸が立てられぬ
一人娘に婿八人
貧すれば鈍する
貧乏くじを引く
貧乏暇なし
百日の説法屁一つ
左衽になる (家の衰運になりたるをいふ)
人の事云へば蕙敷け
羊女は門にも立つな
人の一寸は見てても自分の三寸は見ねぬ
人をのろはゞ穴二つ
百になつての手習
彼岸の中日雨降らず

「フ」の部

ひつた糞の様に云ふ
夫婦喧嘩は犬も喰はぬ
袋耳
二目と見られぬ
懐と相談
踏んだり蹴つたり
袋だゞき
不精者のしき仕事 「しき」は盆正月をいふ
ふんどし締めいでも義理をせよ
ふろしき たつばせ、猫やすめ

「ヘ」の部

平手の長談義
平氣の平左
臍繰り金

「マ」の部

下手の考休むに似たり
 下手な鐵砲も數打てば當る
 遍照金剛云ふな
 尻ひつて尻すぼめる
 蔘かぬ種は生ねぬ
 股にかける
 糞子扱ひ
 円い卵も切り様で四角
 眞綿で首を締める
 廻らぬ門へも七度半

「ホ」の部

棒に振る
 棒程願つて針程叶ふ
 布袋さんの様だ
 骨がない
 骨身にこたへた
 骨折損の草臥儲け
 糞糞が出る (缺点、弱点の顯れ出づるをいふ)
 佛の顔も三度
 坊主憎けりや袈裟まで憎い
 骨皮筋右衛門 (非常にやせた人を云ふ)
 ほれて通はば千里も一里

「ミ」の部

神輿を据わる
 味噌の味噌臭きは上味噌に非ず
 味噌つけた
 水と油 (調和せぬを云ふ)
 水腹も一時
 水いらす
 水掛け論
 三日坊主

「メ」の部

無理が通れば道理が引込む
 むきになつて怒る
 聲は上から貰へ
 虫が好かぬ
 娘十八、番茶も出花

「ム」の部

三つ子の根性百までも
 水に流す
 水の泡となる
 水さす
 身の毛がよだつ
 耳に蛸が出来る
 身を切らるゝやう
 見ず轉
 見るは寶樂
 水臭い (情味のなきを云ふ)

目から鼻へ抜ける
 目から火が出る
 目くさり金
 目糞が鼻糞を笑ふ
 盲滅法
 目と鼻の間
 目の上の癩
 目の玉の黒いうち
 目八分に持つ
 目を皿にする

飯粒で鯛をつる

「モ」の部

餅腹三日

餅は餅屋

持ち提げならぬ

元の鞘へおさめる

物は言ひ様で角がたつ

物は相談

物は試し

桃栗三年、柿八年

百舌きち／＼糊すつて待ちやれ

「ヤ」の部

焼餅を焼く

焼石に水

自暴酒を飲む

やけのかんばち日やけのなすび

安物買の銭失ひ

やせ我慢を張る

藪から棒

藪蛇

山の神が荒れる

闇夜に提灯

やぐらを上げる

薬罐頭

野心を抱く

山柿に種多し

「ユ」の部

往きがけの駄賃

雪と炭とのやう

雪の前の熊野炭

雪は豊年の兆

油断大敵

湯水の様に使ふ

夢に牡丹餅

湯子をとる (入湯して子を孕むを云ふ)

行かう／＼の尻長

指さりかまきり嘘言ふた者は蛇の穴に入れ

夢の様だ

弱い者いぢめ

弱り目に祟り目

宵の苦み、朝の樂

讀んで字の如し

夜尿たれ嫌ふて夜糞たれ貰うた

夜なべ三兩朝起五兩

呼ぶより譏れ

「ヨ」の部

能く泳ぐ者はよく溺る

慾に頂(キリ)なし

慾の熊鷹股裂ける

慾ほけ

横車を押す

横のものを縦にもせぬ

横槍を入れる

夜道に日が暮れぬ

「ラ」の部

來年のこと云へば鬼が笑ふ

老婆心

樂あれば苦あり

樂が身に余る (身分不相應に安樂になること)

樂は苦の種、苦は樂の種

樂は身の毒

「リ」の部

理が非でも押通す
 利巧な子より白痴な子は尙可愛い
 律義者の子澤山
 両手に花
 良薬は口に苦し
 兩刀使ひ（上戸と下戸を兼ねたるを云ふ）

「ロ」の部

論語讀の論語知らず
 論より證據
 呂律がまわらぬ
 ろくでなし

「ワ」の部

黄痘病の人は何物も黄色に見ゆる
 若い時の辛棒願つてもせよ
 若い時は二度ない
 我が事を棚に上げる
 我が子には目がない
 我が田に水を引く（我田引水）
 我が身を抓つて人の痛さを知れ
 我物顔
 腋の下から冷汗が出る
 渡りに舟

「レ」の部

禮に始り乱に終る
 酒席などで禮儀正しく始め終は乱れるを
 いふ

「ル」の部

留守を使ふ
 類を以つて集る

藁の上から育てる
 悪い事は出来ぬもの
 悪い道には入り易し
 破鍋に綴蓋
 若水汲む時は物言ふな
 渡る世間に鬼はなし
 悪い聲に味噌桶の蓋をせよ

「ヲ」の部

晝に書いた様
 遠慮は腹にたまらぬ
 酔ざめの水は下戸にはわからぬ

「井」の部

威あつて猛からず
 居ても立ってもゐられぬ
 井戸端會議
 野猪武者
 位牌が物言はぬ

「エ」の部

繪に書いた牡丹餅

岡目八目

鴛鴦（夫婦相し外出などに行くを云ふ）
 小田原評定
 男心と秋の空
 男の心と川の瀬は一夜に變る
 男の四十は分別盛り
 男は氣で持つ
 男敷居を跨げば七人の敵あり
 尾鱗をつける
 尾羽うちからず
 女氏なくして玉の輿
 女なければ夜も日も明けぬ

女賢しうして牛賣りそこなふ

女は三界に家なし

女の腐つた様

(男子にして優柔不斷なるを云ふ)

女の猿智恵

女ひでりはしまい

尾をふる犬は叩かれず

男嘘言はず

女三人寄れば姦し

女には十二の角あり

折釘流 (拙劣なる文字をいふ)

をだてのもつこに乗る

女やもめに花が咲き、男やもめに蛆が湧く

四、新宮地方に於ける方言及訛音の調査

接尾語	助詞	接續詞	副詞	助動詞	形容詞	動詞	代名詞	名詞	序	目次	訛言	母音轉訛	父音轉訛	撥音變化	促音變化	拗音變化	清濁轉訛	轉倒音	子音轉訛	附加音	畧音	約音
-----	----	-----	----	-----	-----	----	-----	----	---	----	----	------	------	------	------	------	------	-----	------	-----	----	----

方言とは、限られたる或地域内に於ける言語現象の全体を指すものであつて、その成立状態として

A、古語の殘存。

B、音韻の轉訛。

C、一地方一社會に、始めから特殊の成生をなしてゐる特生語。

の三つが數へられてゐる。

當新宮地方は、和歌山縣の東南端に位し、所謂陸続きの離れ島として、古來水陸交通の艱難を以て天下に開けてゐる土地であるから、方言成立の状況に恵まれてゐる爲、その言語には著るしく方言的特質を有すべき筈であるが、近畿地方方言區域中稍東京に近い色彩（但しアクセントは東京地方の反對なることが多い）を現はしてゐるのは、多分、勇猛果敢なりし我等の祖先が「沖の暗いのに白帆」をあげてお國名物の密柑や炭を、江戸へくと運んだが爲、自ら受けたる言語上の洗禮の賜物であらう。

「郷土の言葉を開いてこそ円満に意志の疎通を圖ることも出来るし、郷土愛の觀念も湧き起つてくる」と又、「言語活動の機能は、實に生活的であり社會的である点にある。故に口語こそ眞の言語であり、方言こそ眞の口語である」と。その言には一理のあることを否定し得ない。且つ我々の生々しい情感の躍動する方言、日本語としてその地方に生命を有した言語が、跡方もなく消れていくことは、誠に惜むべきことであるが、然し、此を他面より考察する時此等は明日の新しい言語學建設の礎としての使命を自覺し、喜んでその犠牲となることを望み得ないであらうか。

もとより言語の本質から見る時は、何れの方言も言語として同等の資格をもつ。この点から言へば、如何なる言語も同等に使用してよいのであるが、他面、言語の職能を考察する時

一、最も正確に思想や感情を表彰し、これを傳達し得るものであること。

二、思想を交換し得る區域が最も廣大であること。

の二條件は完全に具備してゐなければならぬ。

故に如何に切實なる表現の手段であらうとも、了解の側からみれば、一局部の方言は了解する人が一局部に限られることは避け得られない。

我等は國民文化の發達と國語教育の進展を期する上から見ても、各地の方言の長所を重ね寫真とした標準語（共通語といふ意味に於ける）への統一が一日も早く來らんことを望んで止まない。

言語標準化方法の最も合理的で有効なるものとして挙げられたものの中に、標準語を正當に理解する根本的基礎として、自己の方言を正當に理解し、標準語との差異に留意して漸次矯正して行くことが唱へられてゐる。

本調査は右の立場をめざして行はれたものであるが、唯當地方に行はれてゐる方言を、音韻、語彙の上から見て、整理の一端にのぼしたただけであつて、忽卒の間、語法の調査に迄及ぶことの出來なかつたことは、甚だ遺憾に思つてゐる。

○ 名詞篇中植物の方言名は植村一郎先生から御教示を賜はつたことを深く感謝してゐる。

一、名 詞

語彙 備考

(ア)

- アガリコ 神倉神社お燈祭の當日、白装束をつけ、松明を持ちて参詣する者
- アガリト 家の入口
- アカカメ かなめもち
- アカシア はりねんぢゆ
- アクシバ ひさかき
- アグミセ 揚戸
- アグニン 木場の労働者、揚人
- アシヤラグミ あきぐみ
- アツチャコツチャ 反対
- アトサシ 一つの布團に反対の向きにねる
- アマメ ごきぶり
- アマミグサ つばくさ及のちごめ
- アメノウラ(魚) やまべ

語彙 備考

(イ)

- アルキ 町又は區の小使(江戸時代に行はれし名稱)
- アワグサ おほあはがへり
- アゼマメ 大豆
- イシヤイラズ はぶそう
- イシヤダオシ ねびすぐさ
- イソシ 無事
- イタンボ いぬびは
- イチロク ささくさ
- イナシヨロブ ひめたうしようぶ
- イネサ 下女
- イヌウツギ うつぎ
- イスフヂ にはふち
- イビツ さるとりいばら
- イッポンカッポン ひがんばん
- イワ 雁

語彙 備考

(ウ)

- イワタリ 移轉(古語イワタル(渡る)より轉か)
- イワチシヤ いはたばこ
- イワマツ いはひば
- イツケ 親類(一家?)
- ウト、ウトサク、ウツボ、ウツク、阿房 (ウトは空の轉か)
- ウコン ぐこ
- ウシノハモチキ せんになそう
- ウシノヒゲ あせてんつき
- ウナギノヒレ うりかは
- ウノハナ うつぎ
- ウマベ うばめかし
- ウバベ げんのしようこ
- ウメヅル げんののげし
- ウルシケシ はるののげし

(エ)

- エダマメ 大豆
- エツアリ 暖氣
- エノモトソウ いぬもとそう
- エビシヨ ねびづる
- エンコウマキ ちようせんがや
- エンタノキ ひめしやら
- オシキセ 晩酌
- オチヤ 定食外の食事
- オチクソタレ 臆病者
- オトギリス おとぎりそう
- オニカラムシ おにやぶまを
- オニカロヂ おにやぶまを
- オニノメツキ ありごうし、ひ
- オニカロヂ やぶまを
- オバカヅラ はすのはかづら
- オバモチ くらがねもち
- オモヤ 家主

(カ)

- オランダシヨウブ たうしようぶ
- オワイゴト 鬼事遊
- オワエゴト 鬼事遊
- オンゴロモチ 鼯鼠
- オンビヨウナ いぬびゆ
- オニシダ 裏白を時にいふ
- オバコウボウグサ くさねむ
- オヒマチ 休日
- オカモチ 提箱
- カイトボ 蜻蛉
- カエコト 交換
- カキマゼ 五目飯
- カザグルマ たうばな
- カシヤバ あかめがしは
- カタカタマイ 蝸牛
- ガタロボシ、ガラボシ、シリヌキ 河童
- カナメ かなめもち
- カニサシ こあかそ

(キ)

- カブログサ りゆうのひげ
- ガビ 痘痕
- ガビカビ 甚だしき小凸凹面
- ガブツチヨ 切株
- カボチヤ ぼうぶらをも誤稱す
- カミコト 小言
- カミスベ 毛髪
- カラスキグサ ぬまだいこん
- カリバタ 軽業
- カリワダ 軽業
- カ(リ)メント カルメル
- カラクサ まつばぼたん
- カヤボ すすき
- カンス 茶釜
- カンチン 最後尻
- カンチキ しちりん
- カグラサン 轆轤
- キイチゴ かぢいちご
- キコク からたち

キザラ 粗目
 キチキチ ばつた
 キツキ 鼠(幼語)
 △キツネノセキダ ひごつば
 △キツネバナ ひがんなばな
 △キヤルグサ みぞそば
 △キリグサ くはぐさ
 △キンソウ きつねのぼたん
 又きんほうげ

(ケ)
 ゲビツ 米櫃(食櫃より)
 ゲン 縁氣一驗
 ケンタイ 權利
 ケンバイ 忌みて寄せつけぬ
 こと(七里結界の
 末尾轉訛)
 ゲンノミ 拳骨
 △コゴメバナ ゆきやなぎ
 △ゴシユ こしゆゆ
 コヅキ 麩
 コージ 小牛
 ゴツシヤリマ(セ) 謝罪
 ゴトドン 墓蛙
 ゴトビキ 慕蛙
 コビ、コビツチヨ 小さな奴
 △コブシ はますげ
 △コブヤナギ きつね柳
 コミチコツバ 粉微塵

△ゴマクサ たかさぶろう
 △コ(マ)シダ こしだ
 △コマシバリ おひちは
 △ゴムノキ ゆうかり
 △コメシヨウブ ひめたろしょうぶ
 △コメシバ あせび
 △コメツツジ うんせんつじ
 △コノテガエシ このてがしは
 ゴロイシ 軽石より轉、小石
 △コーボーチャ かはらけつめい
 △ゴンバチ いたごり
 △コンベトグサ いぬたで
 コツテ 特牛の轉、强健な
 る牡牛
 (サ)
 ザイゴベエ 田舎者(在郷者)
 サイレ 秋刀魚
 △サエヅリ うりかは
 サ(カ)バリ 棘
 △サカヤムスメ ずむな

△ササクサ こぶなぐさ又、ち
 ぢみざさ
 △サフマスキ たちびやくしん
 △サツマヒバ しもふりひば
 △サルタノキ ひめしやら
 △サルカキイバラ じやけついは
 ら又、たらのき
 △サルノビニ まめづた
 △サルフジ ごようふじ
 △サルノタスキ ひかげのかづら
 △サンズ 橙、又かぶす
 サンバ 太鼓虫
 △サンサイソウ きらんそう
 △サンシヨウグサ こみかんそう
 △サンヒチ こくちはし又、た
 うこぎ
 △サガリグミ つるぐみ

(シ)
 ジーカキムシ 水澄
 タシ(イ) 床下

(ス)
 △スイ(スイ)グサ かたばみ
 スイド 溝

△シチノキ たいみんなちばな
 ジツボ あいこ、勝負なし
 シデ 塵拂(四手よりか、又、
 その印とする拂子の如きもの)
 をシテさいふこれよりか)
 △シビトグサ まつかせそう
 △シヤクナン しゃくなげ
 △シヤシヤ(コ) しゃしゃんば
 △シヤクシナ たいさい
 △シユーラン しらん
 シユーリキ 箱河豚
 ジョーキ 汽船
 シリメメズ 蛸虫
 シロネグサ くさよし
 シヤエン 住家近くの島、
 (菜園の轉?)
 ショーブン 贈物

△スキグサ すぎな
 ズグ 熟柿
 スコ、スコタン、スコツパチ
 スカツパチ 頭
 スズ 徳利
 △ズメノマクラ いよかづら
 △スナガ つるば
 △スモトリグサ おひちは
 △スモトリバナ こすみれ
 △スペリヒヨウナ すべりひゆ
 △スイリヨウヒバ いとひば

(セ)
 セコ 路地
 △セキリユウトていかかづら
 △センリツコ もくせい
 セドリ 陸から船へ荷を運
 ぶこと
 セビ 蟬 (古語)

(リ)
 ゴレコミ 土砂の崩解した處

△ソバノキ かなめもち

(夕) △タイハクレン たいざんぼく

△サクサ 不整頓

△タツボ 田螺

△タナブキン 布片

△タニシヨウブ せきしよう

(ナ) △タノキ 炊事

△タマノキ しろだも

△タンナシ 財産家

△タンマ 遊戯中一時勝負を

△タバス 休むこと

△タツバ みずあふひ

(チ) △チカラグサ 秤

△チチカヅラ ねすみのを

△チチミバベ ていかかづら

△チチミバベ びはばがし

△チヨツバナ 最初

△チビ、チビクソ 吝嗇

△チベタ 地面

△チボ 蓄、掏摸

△チヤンチヤングサ ゆきのした

△チヨウセンクチナシ 時をいふ

△チヨウチングサ つりがねに

△ツキミソウ おほまつよひぐさ

△ツガネ いぼくさ

△ツカミ ささくさ

△ツカイ 猪

△ツデフキグサ 筒袖

△ツメキリソウ みづひき

△ツリガネソウ つりがねにんじん

△ツヤ いわぶき

△ツ(シ)バナ ちがや

(テ) △デシ、デシコボ つるれいし

△テツキ 箆

△テング 最初 頂上

△テングルマ 石蹴遊びに用ふ小石

△テシグイ 電柱

△テンマ(ル) 手毬

△テンマリバナ こてまり

(ト) △トウシミグサ 蘭

△トウクチナシ こくちなし

△トウロクマメ いんげんまめ

△トウネル みみすばい

△トガ つが

△ドクナシ ねびすぐさ

△トコギリ、トコトン 窮極

△トンコツバ 屠殺場

△ドンガラ 軀幹

△ドクエビシヨ のぶごう

△ドクケシ はぶそう

△トマメ そらまめ

△トリアシノキ かくれのみの

△トンガラシグサ ちうよじたで

△ドングリ くぬぎ

△トコナツ まさき

△ドンマ 遊戯にてつくる騎

馬、ウマにドのつ

けるものか

(ナ) △ナギグサ こなぎ

△ナツミカン 夏橙

△ナナクサノオバ おにたびらこ

△ナンバ 玉蜀黍

(ニ) △ニエツボ 煮湯

△ニガダケ めだけ

△ニガホヤ にかがしゅう

△ニク、クラシシ 羚羊

ニシマ 南西風

△ニツチユバナ まつばぼたん

△ニドナリ 鶏豆

(ネ) △ネキ 傍、側

△ネコハヒグサ ねのころぐさ

△ネシヨ、ネシヨツバチ

△ネヅミノテ 女を罵りていふ語

△ネヂ はうきだけ

符を結ぶ爲に用つ

た若枝

△ネバツツジ もちつつじ

△ネブリ ねむの木

(ノ) △ノギク のこんぎく、よめ

な、りゅうのうぎく

千本蘭等をいふ

△ノヂソ ひめぢそ

△ノボトリ あしぼそ

(ハ) ハー 利錢

△ハイイチゴ くさいちご

△ハガマ 釜

△ハクラ 日射病

△ハサミグサ やはずそう

△ハシリガチ かけっこ

△ハツバタ 自動自轉車

△ハナギリ お轉婆(發才)

△ハナサフラン たうざり

△ハネ さふらんもぎき

△ハネ 葉

△ハバカキ 犬泳

△ハビ 蝮蛇

△ハブソウ ねびすぐさ

△ハベノキ うばめがし

△ハマゴボウ 濱あざみ

△ハマヂシヤ つるな

△ハマウマベ はまひさかき

△ハマビシヤコ

△ハモチ(キ) せんになそう

△バラナギ なきいかだ

△ハリソバ ままこのしりぬぐい

△ハシドリ むささび

△ハンチャ 半纏

(ヒ) ヒカツバ よく乾いてから

△ヒゲニンジン うむさよう

△ビシヨ ぬかるみ

△ビジャウヤナギ びやうやなぎ

△ビジョヤナギ 床下

ヒタ(エ) 鶴領

△ビチノキ たいみんたちはな

△ヒツツキグサ うりくさ、きん

みづひき

△ヒツツキツツジ もちつつじ

△ヒメグサ のぎらん

△ビシヤコ、ビシヤカキ、ビシヤシャキ

ひさかき

△ヒヨウマメ 南京豆

△ヒヨウナ ひゆ

△ヒモロスキ たちびやくしん

△ピランカヅラ びなんかづら

△ピンピングサ つるしのぶ

△ピンピンカヅラ (かにくさ)

(ラ) フー 火 (幼児語)

ブー 水 (ク)

△フクイ あんべらい

△フシダカ ゐのこづち

△フクダマ りうゆのひげ

プス 駄目

フツ 蒔

△フトカヅラ ふうとうかづら

△ブラブラノキ きぶし

フルツク 泉

△ブンドウ やねなり

(ヘ)

△ヘイハチ ごきぶり

△ヘクソバナ、ヘヒリバナ へくそかづら

ヘツコキ 詔ふ人

ヘト びり、末

△(ホ)ノキ へぼかや

(ホ)

△ホウノキ はまごう

△ホウキグサ ははきぎ、かうや

ボシ ぼうき

△ホタルグサ 露草

△ホヂ かしういも

△ホヂ 陥没地

ボツツリ 魚籠

△ホツボ うばゆり

△ホトリ あきめひじは

△ホトリ かりまたがや

△ホトロ らぢみぐさ

△ホンダラ たらの木

△ホウロヘーン まつばぼたん

△ホ(ウ)ン こなら

ボサ 流木?

△ミツデ かくれのみの

(ム)

ムサ 乱暴者

ムクロデ 懐手

△ムスメナ すゐな

(メ)

△メアカ かしおすみ

△メクラグサ あれじのぎく

△メクラバナ ひめむかしよもぎ

メツソウ 目分量

メツバ、メツバチ 目高

△メハリカヅラ なつづた

メメ 虫 (幼児語)

メメコ 仔牛

△メンピヨウナ ひゆ

(モ)

モサ 乱暴者

(ヤ)

△ヤブイチゴ ふゆいちご

△ヤブニツケイ しろだも

△ヤマイチゴ なのはしろいちご

ヤマゼ 南西風

△ヤマブキ のぶき

△ヤマゴンニヤク てんなんしょう

△ヤマソテツ ししがしら

△ヤマギク りゆうのうぎく

△ヤマミヨীগ やぶみようが

△ヤマナ すゐな

△ミズハキ、ミドハゲ めごはき

△ミツグサ あきのたらそう

△ミヅソバ みぞそば

△△ヤマノカミノタスキ ひかげの
 △ヤママクリ かづら
 ヤマド、ヤマヲヂ 山稼人
 (廣角方面にて)
 ヤロ 腰に吊る煙草入
 (薬籠をヤロといふよりいふか)
 ヤンガ 乱暴者(やんちやより轉か)

(ユ) △ユウ ヨキザクラ ゆきやなぎ
 △ユミノキ やぶむらさき
 ユワ ヲ 嘔
 ユワタリ 移轉
 ヨタンボ 泥酔者
 ヨドラ 枯枝
 △ヨロイギ ねむの木を通名の

(リ) △リョウゼツ 龍舌蘭
 △リンノキ ちんちやうげ
 (ロ) ロカイ 笈の左右兩端をいふ
 (ワ) △ワカバ ゆづりは
 (シ) シネ 下女(姉より)

二、代名詞

1、自稱

アタエ オンダ(ラ) オツラ
 ワアシ ワキ ワーキ
 ワタキ(エ)

2、對稱

アゼ(我兄)古語 アジヤ
 アレ アンタ
 アンテ オハン
 ワイツ ワガ

3、他稱

アンテキ (あの人)
 アンナン (あの人)
 コンナン (この人)
 テキ(彼) テキサ(彼)

三、動詞

(ア)

アマス 吐く(幼兒に對して用ふ)
 アラカル 離れる(一番と二番とは大分あらかつてある)
 アラケル 掃除する(整理する)そこら、あらけたれよ
 アル むる(先生や、あるか)一般に有生無生を通じて用はれる

(イ)

イノ 歸らう
 イラクテクル(語) 苛立つ
 イテクル 行く

(エ)

エシム そねむ

(カ)

カイゴマワル(語) 方向をかへる(牛鉞)
 カウ(糊ヲカウ) 糊づけする
 ガース(語) ございます

(ク)

クライ(シ) 語) 下さい
 クラ(ク)ンセ(語) 下さい
 クダンシ(語)
 グワス 崩す

(コ)

コサウ、コサエル こしらねる
 コシヤエル、コシヤウ
 コツカラカス ころばす
 コツベタ ませた(老成)

(サ)

サラス 爲す

(シ)

シアルク あるさまわる
 シコル 力む
 シシル 叫ぶ
 シマウ こはす
 シヨウ 背負ふ
 シモレル 毀る
 ジユルイ 1、ぬかること(あの道アじゆるいさか氣をつけてけよ)
 2、ゆるい(帯がじるい)

(ス)

スイロニハイル(語) 潜る
 スダル 退く
 ズボル ずるける

(セ)

セー 爲せ
セガエル 塞く
セントマイルス (語) せない

(ツ)

ツクモル 蹲む
ツロクスル 釣合ふ

(フ)

ブラクル 吊りさげる

(ヘ)

ヘコイル へこむ
ペシャンコニスル (語) 壓潰す
ベシャンコニスル (語) 壓潰す
ヘツカラカス みせびらかす
ヘシャイツケル おさへつける

(リ)

ソシキツタル 細き物にて強く打ッ
ソス
ズレル 崩れ落ちる

(ト)

ドシマワス、ドスエル
ドヅク、ドヤシツケル ながり
つける

(タ)

ダカエル 抱く
タクル 耽る (イツマデ遊
ビタクリヤルンナ
ラ)
タシタル 告口する

(ナ)

ネイナイスル (幼語)
ナオス 仕舞ふ
ナハレ (語) なさい

(ホ)

ホカス 棄る
ホットク すぐしておく
ホラクル

(チ)

チビル 少しひる
チヨチヨギル ちよんぎる

(ニ)

ニヤクラカス (語) 強く打ッ
ピリキル 疾走する

(マ)

マイカス 失ふ (まやかすより)
マイルス やめる
マクス ころがす
マクラカス

(モ)

モジク 毀す

(ヤ)

ヤッタ 見た (ミーヤッタ、
見て見た)

ヤル

ある (ミーヤル、
見てある)
ヤロ (語) でせう、であらう
(クルヤロ)

四、形容詞

[エ]

エエ よい

[コ]

ゴツイ 過大な?
コワイ だるい

[ツ]

ツツナイ 苦しい

[オ]

オッチイ 怖い (幼語)

[サ]

サクイ 脆い
サライ 新しい

[ト]

トツケモナイ とんでもない
(江戸方言)
ドンガライ 極端に辛い (ドンは貧?)

[カ]

ガライニ 強く

[セ]

セツロシ 狭苦しい

[マ]

マタイ 鈍い、とろい

[ク]

クサッタ つまらない

[チ]

チコイ 小さい
チーコイ

[ヤ]

ヤラコイ やわらかい

五、助動詞

1、敬讓の助動詞

命令型「なさい」は「ナハレ」に

シメトキナハレ 締めなさい
立チナハレ 立ちなさい
ホッタリナハレ 捨てなさい

2、時の助動詞

未來型「う」は「ラ、ライ」となる

イコラ 行こう
マイシヨウ(ライ) やめよう
遊ボラ 遊ぼう

3、可能の助動詞

「られる」は「ヤレル」となる

キヤレル 来られる
出席シヤレル 出席しられる

4、推量の助動詞

(1) 「う、よう、だらう、でせう」は「ジャロ」に

マダハイイジャロ まだ早かろう

心配シヤルジャロ 心配してゐよう

ドノ位アルジャロ どの位あるだろう

ソレハ面白イジャロ それは面白いでせう

(2) 「そうだ、そうです」は「ソウジャ」に

折レソウジャ 折れそうだ

(3) 「ようだ、ようです」は「ヨウジャ」となる

案ジテキルヨウジャ 案じてゐるようだ

5、否定の助動詞

「ぬ、ない」は「ン、ヘン、センヤン」となる

シヤヘン 爲ない

イカン、イカセン 行かぬ

通レン、通レヤセン 通れない

イラレン、イラレ(ヤ)ン いられない

讀メヤン 讀めない

出来ヤン 出来ない

人ヤナイ 人がゐない

6、比況の助動詞

(1) 「ようだ」は「ミタイジャ」となる

鬼ミタイジャ 鬼のようだ

(2) 「ような」は時に「ガナ、ガイナ」となる

コガ(イ)ナ本 このような本
ソガ(イ)ナ事 そのようなこと

7、使役の助動詞

「せ」は「シ」となる

行カシタレ 行かせてやれ
サシタレ させてやれ

8、指定の助動詞

「だ、です」は「ジャ、ヤ」となる

ソウジャ そうです
ソウヤ そうです
ソウヤナ そうだな

六、副詞

アイサニ 時々(アイサ、神樂の時の拍子詞)

アルキモテ あるきながら

アンジヨウ 都合よく

コガイニ 此様に

コガナ 此様な

コゲナ 此様な

ガイナ たくさんな

ザスイ 粗雑な

センギリ しきりに

セーサイ せいふ

ソガ(ナ)イニ そのように

ソガニ 横着な

チャクイ 横着な

ツイゾ 背て

ド(カ)イニ どのように

トンボニ 不意に、突然

ビシヨビシヨ びっしより

ボロイ 素的な

メメコノアカ 僅か

ヤツクト 生憎

ホイテ として

ホテ として

七、接續詞

カテ ても(お前かて知つてあるちやろ)

ケド けれど(も)

八、助詞

- 1、一般に助詞、特に、を、は、を
を署する風がある
ミカン、ホシナイカ
コレ、イクラナノ
此は、いくらですか
2、ノシ、をよく用ふ
ノシは尊敬、丁寧の意をあらはす
ソウヤノシ さようです
チヨット、ナガイノシ
アシタ天気ジャロノシ
明日は晴天でせうね
モロテモ、カマンカノシ
貰つてもかまいませんか
3、「を」は普通器せられるが時に
「ヲバ」となる
コレヲバ忘レンナ
此を忘れるな

- ミヅモツラコイ 水を持つてこい
4、疑問の「か」は「イ、エ、カン、ソ、
ゾ、ナラ、ナン、ヤ」等に變る
嫌カン、遊バンカン
嫌ですか、遊びませんか
イタクツ拾タヤ
いくつ拾つたか
何イ 何ですか
何エ 何ですか
イツゾ 何時か
ドコソイ、オイタンジャ
何處かへ、置いたのだ
何シヤルンナラ
何をしてゐるのか
ダンナラ 誰か
コレナンナン 此は何ですか
5、「から」ので「を」「サカ」又は「サ
カイ」「モン」に

- コリヤワリサカ、カエテオクレ
此は悪いから替えて下さい
アントラ、コンモン
あなた(達)が来ないので
6、「しか」を「ホカ」に
五錢ホカ持テナイ
五錢しか持つてゐない
7、「で」に、ある、ないが伴つて「
ジャ」「ジャナイ」となる
アリヤ松茸ジャ
ナニニ松茸ジャナイ
8、「ても」を「タテ」又は「タルテ
テ」に
イクラ人がエーユータテテ
どんなにお人よしだといつても
イクラ人ヤダーマツタルテテ
ばかに私が黙てゐるといでも
9、「と」を時に「テ」ともいふ
五錢、足タランテユータ

五錢たらないと言つた

- 10、「が、は、だ」を「ヤ」に
祭ヤキタネー 祭が来たねね
一人ヤミイヨ
一人は見えてゐる
犬侍ヤトカ何トカ
犬侍だとか何さか
11、「ながら」を「モテ」に
タベモテイコラ
食べながら行こう
12、「など」を「ラ」に
今頃自動車(ラ)アルモンカ
今頃自動車などあるものか
13、「ね、ね」を「ノ、ノー、ノ
シ、ナ」に
キレイジャロ(綺麗)
キレイジャロノシ(だろ)うねね

九、接尾語

君 さん
盆ゴシ取ツテクレ

オモシロイジャロナ
面白いだろ(う)ねね

- 14、「の」は「ン」に
コリヤ、アゼンカ
此はお前のか
四角インナラ 四角いのなら
ドシタン どうしたの
シヤルン してゐるの
コレデ、エエンジャノ
此でよいのですね
15、「のは」は「ナ」に
アノ人ナ、コースルンジャ
あの人は、こうするのだ
16、「ば」は「ヤ」又は「タラ」に
イキタケリヤ 行きたければ
キキヤ 聞けば
二二三丁イタラ 二二三丁いけば

ハマ、ハン さん
コレ十錢ヤノオクレ

17、「だ」を「ヤ」又は「ジャ」に
カワイソウジャ
かわいそうだ
シランノヤロ
知らないのだらう
18、「…へ」を「イ」に
ドコソイ、オイタンジャガ
何處かへ、置いたのだが
19、「より」を「トナラ」に
アレトナラ、コレノホウガエエ
あれより、これの方がよい
20、終助詞「とも」を「イデ」に
行ケルカ、行カイデ
行けるか、行くとも

ヤン さん ヒーヤン
イシ (古語)意味なくして、語
調を強むる語(ソウシヤイシ)

十、感動詞

ホレ そら、それ
 ドー どれ
 ニシ、ノ、ノ、ね、
 随分寒イニシ
 アンノ
 アンノ
 アンノ

ガイ
 コナナ天氣ニ下駄ハイ
 テキルガイ
 ココニアルゲ
 ソンナラ一人デ焼ケ、ダ
 ココニアツタデー
 アンボラ
 食ベヨレ
 見セテ、ヨ、テヤ
 行クワソ

ワソ
 わ、見ルワソ

十一、訛語

一、母音轉訛

1、Aよりiに

姉 イネ(イネサ)
 AよりUに カサブツ
 痲(かまふた) スツクリ
 すつかり
 AよりOに エソ
 餌(ね) シロウヲ
 白魚 タボコ
 煙草

2、iよりAに

疊む タトム
 ふくらむ フクロム
 鳳仙花 ホウセンコ
 AよりEに バレン(ワロ)
 葉蘭
 2、iよりAに
 びつくり ビツクラ
 ひつくりかえす
 隅 ヒツクラカエス
 スマ

iよりUに

くたびれる クタブレル
 しがみつく スガミツク
 すり火 スル火
 すりみ スルミ
 讀みにくい ヨミヌクイ
 iよりYUに
 衣桁 ユコウ
 言附 ユイツケ
 樋 トユ

岩 ユツ
 井戸 ユ(ー)ド
 祝ふ ユワウ
 位牌 ユハイ
 鯛 ユワシ
 iよりEに
 浴びる アベル
 い、え 音言
 エンビツ エンベツ
 榮耀 エエヨ
 狼 オーカメ
 錠 カスガエ
 家内 カナエ
 煙管 ケセル
 狐 ケツネ
 慈姑 クワエ
 扶(たす) コゼル
 菜(さい) サエ
 蛭(むし) シジメ
 藝(げい) ゲー

3、UよりEに

歳暮 セエボ
 稽古 ケエコ
 芝居 シバエ
 精出す セエダス
 鹽 タラエ
 二階 ニカエ
 呪む ネラム
 飯米 ハンマエ
 額 ヒタエ
 塀(へい) ヘエ
 帆船(せんぱん) ホマイセン
 脂 ヤネ
 iよりOに
 引揃る ヒコズル
 3、UよりEに
 少い スケナイ
 緑(きぬ) ヘチ
 UよりOに
 いざくさ イザコザ
 (もつれ、ごた〜)

四〇五

鰻 オナギ
 浮節(浪花節) オカレブシ
 神主 カンノシ
 金具 カナゴ
 煙管 キセロ
 唇 クチビロ
 煙る クスポル
 虚無僧 コモソ
 淨瑠璃 ジョーロリ
 狸(ねずみ) タノキ
 粒(つぶ) ツボ(豆三ツボクレ)
 手拭 テノゴイ
 白墨 ハコボク
 福祿壽 ホクロクジユ
 懷(なつか) ホトコロ
 螢(たな) ホータロ
 ランブ
 ランブ
 Uよりiに
 鮎(あひ) アイ
 動く イゴク

搔むしる カキミシル
 蕨 ミシロ
 指 イビ
 歪む イガム
 4、EよりAに
 返す カヤス
 こける コカル
 Eよりiに
 霞 アラリ
 いゝわ イーイ
 エ(疑問の)
 意の發聲) イ
 夷 エベス
 …エ …イ(袋イイレットケ)
 蛙 カイル
 錠前 ジョーマイ
 蠅 ハイ
 佛様 ホトキサマ
 前掛 マイカケ
 前垂 マイダレ

5、OよりAに
 煙突 エンタツ
 不具者 カタオ
 焙烙 ホーラク
 Oよりiに
 熾す イコス
 みともない ミトミナイ
 OよりUに
 遊んでゐる アスンデキル
 あおのく アオスク
 剃刀 カミスリ
 剃る スル
 風呂敷 フルシキ
 6、母音延長
 甘い アーマイ
 赤い アーカイ
 胃、蘭等 イー
 鵜 ウー
 繪、柄等 エー
 尾、緒等 オー

可、蚊等 カー
 瓦 カーラ
 垣 カーキ
 鍵 カーギ
 木 キー
 黒い クーロイ
 毛 ケー
 小癩な コーシヤクナ
 子、粉等 コー
 先に サーキニ
 差 サー
 白い シーロイ
 朱 シユー
 棕櫚 シユーロ
 如露 ジョーロ
 巢、酢等 スー
 瀬、脊等 セー
 田 ター
 血 チー
 ちゅんと チャーント

手 テー
 戸 トー
 菜 ナー
 荷 ニー
 根、値等 ネー
 齒、葉等 ハー
 火、日 ヒー
 麩、斑等 フー
 尻 ヘー
 帆、穗等 ホー
 間、實、等 ミー
 目、芽等 メー
 藻 モー
 藕 モーチ
 矢 ヤー
 湯 ユー
 樂に ラークニ
 櫓、紹等 ロー
 路地 ローヂ

7、母音消滅

輪 ワー
 車前 オバコ
 牛蒡 ゴボ
 身上 シンショ
 巡禮 ジュンレ
 十能 ジュノ
 性根 ショネ
 角力 スモ
 蒸籠 セーロ
 先生 センセ
 葬禮 ソーレ
 追従 ワイシヨ
 丁寧 テイネ
 鉄砲 テツポ
 手棒 テンポ
 遠い トイ
 泥鰌 ドジョ
 豆腐 トフ
 仲人 ナコド

二、父音轉訛
1、DよりRに

人形 ニンギョ
 人相 ニンソ
 日雇 ヒヨ
 貧乏 ピンポ
 辨當 ペント
 庖丁 ホチヨ
 酸漿 ホヅキ
 面倒 メンド
 余計 ヨケ
 薤 ラッキョ
 禮 レー
 悪い ワリ

ウロン
 ウンローカイ
 オロロク
 カララ
 カロマツ
 コンロ

衣 コロモ
自動車 ジローシャ
洗濯 センラク
そうです ソーレス
談判 ランパン
電(信) レンボン
なんです ナンレス
裸 ハラシ
毎度 ハラカ
まだ マイロ
迄 マラ
窓 マレ
乱れる ミラレル
めでたい メレタイ
火傷 ヤケロ
よほど ヨッポロ
落第 ラクライ
DよりZに イヅ
井戸

侮る アナヅル
復イカザ
戴く イタザク
驚く オゾロク
階段 カイザン
門 カゾ
身体 カラザ
砕く クザク
くださる クザサル
小樽 コザル
定める サザメル
鋭い スルゾイ
育てる ソザラル
相談 ソザラン
正しい タザシイ
爛れる タザレル
動物 ゴーブツ
戸棚 トザナ
等 ナゾ
撫子 ナゼシコ

四〇八

撫でる ナゼル
煙 ノゾ
抽斗 ヒキザシ
筆 フゼ
斑 マザラ
百足 ムカゼ
ごうぞ ゴウゾ

2、HよりSに

人 シト

ひつつける シツケル
百姓 シヤクシヨ
単衣 シトエモノ

3、BよりMに

胃 カムト

4、MよりGに

鷗 カゴメ

MよりBに

あまねる アバエル
あゆむ アユブ

5、SよりHに

俯く ウツブタ
紐 ヒボ
はまる ハバル
明日 アヒタ
泳がせてみる オヨガヒテミル
借して カヒテ
下、舌 ヒタ
七、七厘 ヒチ、ヒチリン
質 ヒチ
室 ヒツ
敷く ヒク
叱る ヒカル
しつこい ヒツコイ
そして ソヒテ
ありません アリマヘン
SよりTに
くすぐる クツグル
恐ろし オトロシ

6、ZよりDに

紫蘇 チソ
SよりYに ユスグ
濯ぐ SよりCに ギツチリ
捨る SよりFに フテル
畦 アデ
演説 エンデツ
大勢 オーテイ
風 カデ
飾 カダリ
かざ(香) カダ
簪 カンダシ
軽業 カルワダ
刻む キダム
きざはし(階) キダハシ
着初め キドメ
金属 キンドク

四〇九

志 ココロダシ
午前 ゴデン
産 ゴダ
座敷 ダシキ
散切 ダンギリ
残念 ダンネン
財産 ダイサン
雑誌 ダツシ
材木 ダイモク
座布團 ダブトン
柘榴 ダクロ
装束 ショードク
修繕 シューデン
心臓 シンドウ
親族 シンドク
しそ(こ)ない シドコナイ
錢 デニ
膳棚 デンダナ
是非 デヒ
薇 デンマイ

税金 デイキン
 貧澤 デイタク
 喘息 デンソク
 せんざい デンダイ
 禪宗 デンシユウ
 雜巾 ドウキン
 雜灸 ドウニ
 象 ドウ
 存分 ドンブン
 善人 デンニン
 全國 デンヨク
 絶体 デツタイ
 草履 ドーリ
 東西 トウダイ
 なせ ナデ
 覗く、除く ノドク
 望む、臨む ノドム
 鯨 ハデ
 膝 ヒダ
 備前鉄 ビデングワ

ふざける フダケル
 風俗 フウドク
 混る マデル
 まざる マダル
 万歳 マンダイ
 満足 マンドク
 三輪崎 ミワダキ
 溝 ミド
 ZよりRに
 簪 カンラン
 飾 カラリ
 風車 カラグルマ
 ございませす ゴライマス
 座敷 ラシキ
 雑誌 ラッシ
 座布團 ラプトン
 人力車 リンリキシャ
 時間 リカン
 自轉車 リテンシャ
 地蔵様 チローサマ

地震 リシン
 覗く、除く ノロク
 水入 ミルイレ
 療治 リョウリ
 硯 スルリ
 7、RをDに
 嬉しい カダ
 蠟燭 ドーソク
 皿 サダ
 それなら ソデナラ
 算盤 ソドパン
 揃わる ソドエル
 處 トコド
 紫 ムダサキ
 もらつた モダッタ
 欄干 ダンカン
 駱駝 ダクダ
 ラッパ ダツパ
 ランプ ダンプ

來年 ダイネン
 乱暴 ダンボウ
 樞子 デンジ
 蓮根 デンコン
 連木 デンギ
 れんげ草 デンゲソウ
 冷水摩擦 デイスイマサツ
 廊下 ドウカ
 六 ドク
 老人 ドウジン
 肋膜 ドクマク
 RよりZに
 力む ジキム
 リン ジン
 留守 ズス
 立派 ジツバ
 RよりNに
 廣角 ヒノツノ
 RよりSに
 ばかり バカシ、バツカシ

8、其他の父音轉訛
 やつぱり ヤツパシ
 GよりKに
 蜥蜴 トカ(蛙)
 WよりYに
 氣をつけ 氣ヨツケ
 NよりMに
 ネーブル ネーブル
 NよりDに
 退く^の ドク
 KよりRに
 まさか マッサラ

四、父音消滅
 土器 カアラケ
 身体 カアダ
 挿して サイテ
 そして ソイテ
 俵 タアラ
 駢足 カケハシリ
 鹽 シヨ
 仕合 シヤワセ
 匂 ニヨイ
 値打 ネブチ
 場合 バ(ヤ)イ
 歩合 ブヤイ
 風袋 フルタイ
 見合 ミヤイ
 夜遊 ヨワソビ
 割合 ワリヤイ
 賑 ニギヤイ
 ひあいな ヒヤイナ

まわり マアリ
よこす オコス
我 アガ
悪いこと アリコト
丸儲 マルアゲ
あれ(汝) アエ

五、撥音化 特に「の」に著し

あのね アンネ、アンノ
いりに インニ(風呂イ
ンニイコラ)
寒いので サムインデ
小便 シヨンベン
それだけ ソンダケ
するな スンナ
長いので ナガインデ
焚物 タキモン
塗物 スリモン
なかった ナンダ(讀マナ
ンダ)

六、撥音添加

見るな ミンナ
見に行く ミンニク
ものなら モンナラ
(ソソナコトスルモンナラ
トットエライメニアウソ)
病眼 ヤンメ
幽霊 ユーレン
やるな ヤンナ
行くのであつたら
イクンヤッタラ
唐辛 トンガラシ
誰 ダレ(アリヤダン
ナ、これは誰か)
何 ナン(コレナン
ナン、此は何か)

七、撥音脱落

四月 シンガツ
牛蒡 ゴンボ
茅花 ツンバナ
陰囊 フンダリ
斑 マンダラ
同じ オンナシ

八、促音化

あちら アッチャ
あしこ アッコ(幼児語)
搔込む カッコム
借りた カッタ
手傳ふ テッタウ
大きい オッキイ
年寄 トッシヨリ
松茸 マッタケ

九、促音添加

赤い アッカイ
阿房 アッポ
固い カッタイ
唯 タツタ
徳利 トックリ
ごても トッテモ
へこむ ヘッコム
樂に ラックニ
いつも イツツモ
けたい ケッタイ
砂糖 サットウ
毎に ゴットニ
續飯 ソックイ
何處 ドッコ
(ドッコイモユケセン)
ひらたい ヒラッタイ
みごもない ミットモナイ
骸骨 グッコツ

十、拗音化

十一、拗音を直音化するもの多し

勘定 クワンジョウ
雑魚 ジャコ
棧敷 シャジキ
左官 シャカン
匙 シャジ
鮭 シャケ
神 シャカキ
先生 シエンシエー
草履 ジョーリ
大概 タイグツイ
苜蓿 チシャ

十二、清濁轉訛

宿題 シクダイ
巡查 ズンサ
等
蟹 ガニ
量 ガサ
草原 クサバラ
蜘蛛 グモ
崩れる グエル
懲らすゴラス
しつくり ジックリ
千振(植) センブリ
土瓶 ドビン
むづかしい ムツカシイ
眞個 シンゴ
(ヨー、シンゴニ)
(イレテキケ)

十三、轉倒音

カダラ
スコイ
ナマイタ
チャマガ
トナダ
ツモゴリ

十四、子音轉訛

カチコム
ヘサエツケル
ジョーサン
クツシヤビ
ケシマヅク
サイナラ
シンヅイ
シキブ
ジョーヤ
ホンナラ

四一四

たんぼば タンボコ
たわむ イバム
つくらう ソクラウ
泥鰌 ジョジョ
蛞蝓 マノクヂ
寝かす ネヤス
針金 ハネガネ
拍子木 ショーシギ
紐 ヒボ
筆入 フレイ(レ)
繭 マイ
まるめる マルケル
眉毛 マヒゲ
償ふ マヨウ
味淋 ビリン
鞭 ブチ、ブイチ
なさいまし ナハイマシ

十五、附加音

朝 アサリ

四一四

アリコ
アシタリ
アヤカス
イキヅム
エンノ
ドエライ
エンドマメ
カシン
ガケツチョ
カ(ツ)ツボ
カケアシリ
キリモ(シ)
ドギツイ
ケサリ
タンコブ
サキツボ
しないのに シモセンノニ
しらん シランビーツ
しよばな ショテツバナ

スペクル
スミツコ
ダマクラカス
チヨロクサイ
チヤコマル
チイト
チヨビット、チヨ
ツビリ、チビット、チ
ヨツコリ
ツチノコ
ツユリ
トロクサイ
トラマエル
トバカス
スルクタイ
スクトマル
ネトボケル
ネジクレル
ノタクル
ハイシヨ
ハイシヨ
ヘイシヨ

四一五

ハナギレ
ハシツボ、ハナツボ
ハシラカス
ハツタイコ
ヒヨコタン
ヒラクタイ
ヒンガラメ
フイキ
フタゲル
ヘボクタ
ホトバカス
マゼクル
マツバラハダカ
マツカイニ
マルツコイ
ミゾゴ
ミテミル
ムクタイニ
メノコダマ
メノクリダマ

十六、畧音

アツナイ
アドナイ
アンド
イチマ
ウメル
オーキニ

四一五

女子衆

オナゴシ

(下女をいふ)

- おーごか オード
- 押入 オシレ
- 枋 オコ
- 学校 ガツコ
- かこつける カツケル
- 痒い カイ
- 買ておくれ コーラー
- 擬寶珠 ギボシ
- 氣障り キザ
- 蛇 クチナ
- けれご ケド
- 卦算 ケサン
- 精靈 ショーロ
- 仕様がなシ シヨナイ
- 熟柿 ズグシ
- 煎餅 センベ
- 大根 ダイコ
- 團平船 ダンベ

つれて行く ツレテク

てっぺん テツベ

癩痢 (アリヤテンカモチジャ)

出額 デビ

天井 テンジョ

所 トコ

どうにもならない ドモナラン

櫓桶 ニナエ

盗人 ススト

半分 ハンブ

蠅入らず ハイラズ

鼻びしゃげ ハナビシヤ

ほんとうに (ミテミナナハレ、ホニ、オモシロイデ)

ほんとうにそうですか(ねね)

ホニエ(サー)

まあ、あれ マーレー

短くて ミジコテ

天結 モット(任)

ヅガニ

よく ヨー(ヨー見ヨ)

若衆 ワカイシ

さかさま サカ

思ふて オモテ

大きくなる オキナル

こうばしい コーバシ

金米糖 コンベト

心持 ココラ (マア、ココラワリヨ)

芝原 シバ

十七、約音

愛想がない アイサナイ

あやつり アヤチ

(言葉ノアヤチガワカラン)

いゝかと思つて

エーカトモテ

いつてあげておくれ

イタツテクレ

お前 オメ

来てはいけない キヤレン

下さいといったら

オクレーノーテヤ

寝てゐる ネタール

其處邊 ソコタリ

…には ニヤ (死ニヤセン)

…ねば ニヤ (ソーデモセニヤ)

…のは ナ (切ッテシマウナオシイ)

他人の家 ヒトナエ

見ぬる メール

向ふのあたり ムコタリ

持てあげる モツタル

そうかねね ジャーイー

そうではあるが ソヤケド

そうだから (ツヤ(ツヤ))

というても ジャテテ

小さくなる チソナル

連れだつて行こう

ツレモテイコラ

似てゐる ニ(ー)タール

擔てゐる ニノタール

せんなにして ドヤツテ

炊ぎ桶

カッシヨケ

観世経 カンジヨリ

ければ ケリヤ、ハヨネヨヨ

今度は コンダ

此間 コナイダ

これは コリヤ

こしらゐる コシヤエル

御馳走 ゴツツオ

此夜 コイサ

しまつておく シモトク

誓つた チコタ

違つた チゴタ

机 ツケイ

使つた ツコタ

…てやる …タル(書イタル)

年寄 トシヨリ

いわば イヤ (山田トイヤ、此頃チヨツトモ見エン)

長くなる ナゴナル

五、迷信

四一八

迷信とは理性の考へに背く事柄及び同様行事の總稱である。但し正信と迷信との界を分ける事は極めて困難であつて、或事を迷信と考へても其の理由を明確に説明し得ない場合又は迷信と知りつゝも尙之れを避け得ない場合などが余程多い様である。例へば夫婦の年齢が其の運命を支配するとの信念に對して之れを迷信と斷する人も其の理由としてはかくの如き理あるべき筈はないと、消極的に否定するばかりで、積極的に迷信である證明をする事が困難である。鬼門を恐れ、十三といふ數を恐れる場合理性は之れを承知せないが、何となく其の觀念に支配せられて、これが勢力を脱することが出来ないといふ様なのも亦迷信たるを失はない。

迷信の内容として大体に通ずる特徴は箇人一場合によつては家族、國家等)の運命即ち吉凶禍福に關して或る事件又は行事が定命的に將來の運命を定める力があるとする所にある。

この様に運命を豫知する方法としては、卜筮、辻占、其他類似の方法も余程多い。

定命を避くる方法としては、方違、祈願、拂淨等種類が多い。又發達の上から見ても、迷信は前代に行はれた信念が其の惰力を維持して現在の思想に容れられない事、又これと衝突しつゝ勢力を持つてゐることにある。

此の場合には、一時代又は一箇人の持つてゐる思想に一系の條理組織ある中に此の條理外の信念が寄生して、全体の組織に不調和を起すのが常である。迷信から生ずる不幸には此の部類が最も多く精神病と

して醫學的に扱ふべきものをも、狐憑として扱ひ。患者をこと更に虐待する様なものは、即ち前代の觀念が現代の醫學を犯すものである。この様にして或時代又は國で迷信として排斥する事で他の時代又は國全体が、之れが爲めに動かされる事が少くない。

全体から見ると迷信は其の前提に何物か証明せられない事を含むが、之れに反對し之れを排斥する理由は消極的であるのが普通とする。之れ今日尙迷信の勢力を失はないわけである。

我が熊野地方に行はれてゐる迷信を集め左の十二項に分けて見た

- 一、病に關するもの
- 二、吉事に關するもの
- 三、凶事に關するもの
- 四、旅行に關するもの
- 五、婚禮に關するもの
- 六、葬儀に關するもの
- 七、建築に關するもの
- 八、動物に關するもの
- 九、出生に關するもの
- 十、勝負事に關するもの
- 十一、祈願に關するもの
- 十二、雜

一、病に關するもの

- 寫眞の顔へ疵を附けて置くと寫眞の本人は顔に腫物が出来る
- 正月正門の注連繩に用ひた橙を二十日におさめる時母屋の棟をほり越して落ちた所に埋めて置くと一家瘡瘡のまじないとなる
- 青竹の筒へみようがの花を密封してなげしへ上げて置くとき瘧疾のまじないとなる
- 食事の夢を見ると風を引く
- 女のとぎ髪を鳥にくはへられたら長病に罹る
- 便所へ唾をはくと口が腫れる
- 爪や髪を火にくべるゝ氣ちがひになる
- 梅干を臍の上ののせて置くと舟酔のまじない
- 櫛の葉を臍の上ののせて置くと舟酔のまじない
- 船に乗る前に地面に一の字を書き乗船して寝る時そこに一を書いて(つまり十字を書く)その上に寝ると酔はぬ
- しびれのきれた時には藁ごみなどを額にはつて置く
- 初茄子を戸口に吊して置くときあせものまじない
- 蜘蛛の巣でいぼをくゝつてたくと落ちる
- 精霊様の箸でいぼをつゝいて置けばとれる
- 目こじきの出来た時には障子のさんへ灸をすねると直る
- 卵を踏むと足が太くなる
- 卵を踏むとなますが出来る
- 丑の日に爪をとると牛の爪になる
- 病氣中に便所で倒れるとその病人は死ぬ
- 桑の木で作つた箸をつかふと中風になる
- 他人の足の裏を搔くと病に罹る
- 蛙に小便をひりかけられるといぼが出来る
- 人に唾をはきかけると口瘡が出来る
- しやくりが出た時は茶碗に水を入れ杉箸を十文字に渡し四方から一口づゝ飲んで飲み干すと直る
- 味噌が酸ふなれば家中に病人が出来る

- 目こじきが出来たら着物のつまを黒糸でつまんでくゝつて置くと直る
- 家根に草が生ずれば病あり
- 女は雪隠の掃除を怠らなかつたら腰氣の病が無い
- 蚯蚓に小便をすると前が腫れる
- 生木に釘を打つと病氣に罹る
- 梯から落ちた怪我は容易に直らない
- 蛇の屍をいけてやると齒痛が止む
- 火に唾をはけば瘡蓋が出来る
- 田植の握飯を喰ふと夏まかせない
- 馬の夢を見たら風を引く
- 雨の日にごもりの眞似をすることごもりになる
- しじみ貝の汁を飲むと目の病に罹らぬ
- かぼちやに指をさすとその指がをちる
- 猿の夢を見たらその日怪我をする
- ほうせんこの花を植ゑると病氣になる
- びはの木を畑に植ゑると病氣になる
- 釘で足をついた時かなづちでついた所を三度たゝくと血がとまる
- 齒のいたい時に便所に針を立てておがんでおくとなほる
- 人につばをかけるとつんぼになる
- 牛の夢を見たら風を引く
- 三りんぼうに高い所へ登るとけがをする
- ちまきをほしてそれをおつゆに入れてたべると夏まけしない
- 左の胸にほくろがあつたら肺病になる
- 柿やかんざし等頭にさす物を便所に落したら頭の病氣がなせる
- 洗濯物はさした方からぬかぬと病氣にかゝるとなほらぬ
- 朝日が登る夢を見れば病氣が全快する
- 墓の花立の水でいぼやあざを洗ふとなくなつてしまふ

○水をくみに行く途中葬式にあふと病氣になる
 ○臍のあかると腹痛がおこつて止まらない様になる

○牛の夢を見ると風邪を引く

二、吉事に關するもの

○シダの箸で飯を食へば病氣になる
 ○めこじきが出来たら七軒の家の米をもらつて来てそれをたべたら直る

○電話の吉番號二四八(末廣)七五三(注連繩)
 ○あまめが殖ねると金持ちになる
 ○かくれた所にあざがあると末は金持ちになる
 ○頭に大きなほくろがあると出世する
 ○頸にはくろがあると衣服に不自由せん

○鬼灯を庭に植ねると年中病人が絶ねない

○家に二十日鼠が這入ると家が榮ねる

○目こじきの時に井戸へ小豆をほり込めばなほる

○眉の丈が長いと長生する

○病人が死んだ夢をみるとその人は追々全快に向ふ

○若白髪は幸福になる兆

○海亀を飼ふとその家に病人が絶ねぬ

○男の子が母親に女の子が父親に似るとその子は出世する

○犬に大便をなめられるとその人は目が見えなくなる

○掌の兩どかけ筋の人は出世する

○夜明けの夢見れば病人本復

○目の横線より耳が下にある人は偉い人である

○歯が生けない時は牛の涎をぬるとよい

○毎日蕎麥をたべると小遣ひに不自由はしない

○赤い貝を母親に見せると乳がはれる

○南天の木が家の軒より高くなると繁昌する

○元日に病氣でねる時枕をして寝るな

○裏へ南天を植ねると病人が絶ねる

○船に乗る夢を見たら出世する

○川へ髪の毛を流したら髪が長くなる

○大蛇の夢を見たら大利得がある

○うごんげの花が咲けばその家が繁昌する

○腕に黒子があつたら書方が上手になる

○人に斬られた夢を見ると翌日金を得る

○くちなしの夢を見たらお金を拾ふ

○水甌に蛇の姿がうつたら家は繁昌する

○足の指が拇指よりも長いと親よりも出世する

○而くその多い人は長生する

○耳の中に黒子があると其の人は幸福がめぐる

○手の指の細い人は懶巧である

○星がさんだらすぐふところへ手を入れよ明日幸運がめぐつてくる

○顔中に黒子が九ツあつたら金持ちになる

○水甌へ苔がはねたら金たまる

○初ゆめに富士山を見れば大に立身する

○死人を抱く夢を見たら其一家に福がくる

○馬にのつた夢を見ると出世する

○指のうづのある人は懶巧者だ

○道で扇をひらつたら末廣といつてよい

○富士、鷹、茄子、葬式の夢は吉夢である

○ほくろが足にあつたらよく走る

○耳の大きな人は大金持ちになる

○足の親指のとなりの指に俵をふんでゐたら食べるものに不自由しない

○夢に盗人を見たら望みは叶ふ

○くちなが袴をぬぐのを見たら福の神である

○小豆御飯をすきな人は出世する

○着物を裁つにはたつの日に裁つて みの日に着たらよい

○鼻へ汗をかく人は良い嫁さんがきてくれるし女の人は良い所へお嫁に行く

○鼻へ汗をかく人は良い嫁さんがきてくれるし女の人は良い所へお嫁に行く

○鼻へ汗をかく人は良い嫁さんがきてくれるし女の人は良い所へお嫁に行く

三、凶事に關するもの

- 寫眞は三人とるな中の人は死ぬ
- 年齢の厄年、四二(死に)女の厄年(三十三)
- 忌む年齢、四十九(始終苦)
- 電話の忌番號四(死) 四二(死に) 四四(死屍) 八四二(末すぼみ) 四四九(四十苦勞)
- 子供の生れた夢を見るは凶來る
- 神に詣る夢は凶なり
- 水汲みは表から出て、裏から這入るな(裏から出て表へ這入るも全様)
- 表鬼門は男に裏鬼門は女に祟る
- 大便所は西は凶東は吉
- 飲み水は北や南は悪い
- 一家族の三所寢は凶
- 船乗衆には蛇は禁物(長滞船をする)
- 鑛山師や山商賣の人には猿は忌物(サルとは言はない)

四二四

- 未女は門へも立つな
- 丙午の女を家内に持つな
- 夜蜘蛛は親に似ても殺せ、朝蜘蛛は鬼に似ても殺すな
- 女の口笛は悪魔を呼ぶ
- 家の裏庭に酸漿を植わて置くと病人が絶ねぬ
- ビワ、月見草、イチゴを屋敷に植わるな
- 丑の日に釜や鍋のすみをかくな
- 樹を伏せて置くと貧乏になる
- 猫を殺したら死ぬまで祟る
- 満月の時に長く月をみてゐると桂男にさそはれる
- 着物は二人でこしらへるな
- 午後から新しい草履を下すな、下すなら鍋墨を草履の裏へつけて下せ
- 膳の上に塩と味噌と並べるのはよくない
- 墓のものを家へ持つて歸るな
- 男の血を女に踏まれるとわるい

- 初胡瓜に姓名を書いて川に流すと水難よけになる
- 鳥の余り鳴く日はわるい事がある
- 盆の十五日に泳ぐな又魚をつるな
- 本をふむと字が下手になる
- 草履は片方だけつくりかけておくな
- 二人一緒に火を吹いたら悪い
- 水くみを迎へるな
- 茶を入れて墨をすりそれで字を書くと手が下る
- そば膳でたべるな
- 格子から物をやりとりするな
- 水を先に入れて湯を入れるな
- 南天の木が實らぬ時は不吉がある
- 籠をかぶると大きくならない
- 筍の夢を見ると箸を盗まれる
- 天井や軒下にうごんげの花が咲いたら不幸がある
- 家の横のばべの木をきるな
- 中柱の前に寝てはわるい

- くごの前で鉋丁を使ふな
- 飯を二人でもるな
- 新しい下駄をはいて便所へ行くとき早くわれる
- 男が女にまたがれると出世しない
- 墓へいつて物をおこしてもひらうな
- 三ツ節の吹竹は使ふな
- 膝を揺ると貧乏になる
- 頭にふろしきをかぶると悪い
- 柿の箸でごはんをたべると悪い
- 足をなげ出して裁縫すると上手にならぬ
- ものさしをまたいだらわれる
- くごの上にはものをおくな
- 茶をのむ時左でくむな
- 着物は左前に着るな
- 火の前で小刀を使ふな
- 三軒長屋のまん中は悪い
- くごの口を北向にするな

つづく

- 体にすみをつけてねるとおびねる
- 自分の年の日に灸をやくな
- 便所にはまると名をかへよ
- 食物は箸ではさみ合つて受取るな
- うる年に接木をするな
- 格子が四本二本となつてゐると「四、二、(死)」不吉である
- 髪の毛の多い人は一生苦勞する
- 自分のエトの日に着物をたつな
- 梨の花の多い年は大水が出る
- 杜鵑の初聲を大便所で聞くとよくない
- 一つ甕に二ヶ所の水を入れるな
- 牛の日に大根種を蒔くな
- 夜かくれんぼすると天狗にさらはれる
- 飯櫃のかてをたたくと貧乏神が這入る
- 鏡を破れば七年祟る
- 牛の日に糊をするとその糊がおちるまで腹立ちが
- からのたらひへはいるな
- おれ柿をさしたら苦勞する
- くご場と便所とは棟を違へよ
- お膳にコンコをつける時一片三片は悪い
- 掌にしわの多い人は貧乏する
- 墓でころべば悪い
- 前齒のすいてゐる人は親に早くおかれる
- 牛を過つてやき殺すと孫子七代に祟る
- 八日戻りは不吉
- 雞の青鳴きは不吉の兆
- 赤石を家に入れると火事を起す
- 星が山へ飛び込んだら大水が出る
- 帯のはしをされば壽命がみじかい
- 帯を洗つたら壽命が短かい
- 座敷と庭は同時に掃くな
- 夕方お城山へ登るな 丹鶴姫に招ねかれると死ぬ

- 火事の夢を見るゝ津波になる
- 白餅をくつた夢を見ると死ぬ
- 搦鉢の中で茶碗を洗ふと家が貧乏になる
- 茶碗を叩くと三里むかふの賊が歸つて来る
- 鬼門の場所へ棒などを立て又は不淨なものを近づけ
或は濕氣があつたりしてはいけない犯すと祟がある
- 旅立ち、縫ひ裁ち、寺詣り等は丑の日を忌め
- 寅の日に着物を裁つな
- 鼠が鳴けば火事あり
- 低い所へ蜂が巢を造ると其の年には暴風雨がある
- 水を汲みに行つて水がなかつたら 空で歸るのは
悪い
- 柿を拾ふて頭にさすと苦勞する
- 友引と丑の日に葬式を避けよ
- 田植の夢もよくない
- 墓場で袖が切れたら 持つて歸つたら悪い
- 牛の日に味噌を作るゝ悪い
- 北と沖むいて佛を祭ると悪い
- 火事の夢を見ると水難がある
- 薪を逆にして焚くものでない
- 女で乳に毛の生れてゐる人は子が出来ない
- 雨の時てるゝ坊主をつくと晴天になる
- 朝 下駄のはな緒を切るとその日はきつと何か悪い事がある
- 着物の袖をかぶつたら悪い
- 空鍋に米を入れたらわるい
- こかけに指をさしたら指がくさる
- 山祭の日に山へ行くなよ
- ぬいかけの着物を着てさしではかつたらわるい
- 女の子のはきものを男の子がはいたら出世しない
- 朝 さると言つたら悪い
- 柳が地につくと幽霊が立つといふ
- 蟹が高い所へ上ると大水が出る
- 茶碗のかけたので御飯をたべると出世しない

- 髪の毛を火で焼く、焼けた所は切つてしまはなればのびない
- 夜寝る時に蚊帳の天井を腹につけて寝ると死ぬ
- 坐敷の上で新しい履物を履いたら悪い
- なんてんの木が家より高くなると悪い
- 頭の髪を物指ではかつたら悪い
- 頭の中にうすまきが二つある人は意地悪だといふ
- 夜爪を切ると親の臨終にあへぬ
- 屋根の上で鳥が鳴くと其の家に不幸がある
- 青竹を杖につくとわるい
- 袴をひもにするとわるい
- 御飯の上に箸を立てたらわるい
- 舟を漕ぐ夢をみると親類に禍事がある
- 夜 盞を買ひに行く時はその上に炭をのせて行かねばわるい
- ホーキ星が飛んだら何か事件が起る
- 夜 口笛を吹くと蛇が来る
- 白蛇の夢を見たら錢を拾ふといふ
- 丑の日に爪を切れば二つにわれる
- 妊婦が火事を見たら生れた子供にあざがある
- 疊の角を四枚揃へるとわるい
- 一膳飯を食ふな
- ちび喰すると早く両親に別れる
- 柄杓で外側から汲んで外側へあけるな
- 飯鉢に腰をかける、早く腰がまがる
- 邸宅を表から裏へ、或は裏から表へ通り抜けると禍を招く
- 人の中で其の周囲を廻らぬ事
- 洗濯衣を干すに北向にせぬ事
- 人の出た後で其の室から塵を掃き出さぬ事
- 手帖を綴るのに紙を下向に折らぬ事
- 北枕に寝るな
- 一本花を生けるな
- 燕を捕つたら火に祟る

五、婚禮に關するもの

- 婚禮の式場には菊花を生けぬ事
- 足袋のまゝ寝ると親の死に目にあへぬ
- 鶏が宵鳴きすると火災がある (昔はその鶏を捨てた)
- 手紙の終りを餘白にせぬ事
- 棕櫚を焚けば七代貧乏する
- 爪を火にくべると狂人になる
- 庭の敷居を踏むのは死んだ祖父母の頭を踏むのも全様
- 未女を貰ふと亭主は喰はれる
- 丙午の年の女を嫁に貰ふと家運衰へる
- 婚禮の日は丑寅の日を忌め
- われ毛が終までわれたら遠方へ嫁入る
- 海苔を食べたら嫁入の時犬に吠わられる
- 婚禮の次の日に小鳥が死かけたら災難が多い

六、葬儀に關するもの

- 大道(神倉山下)を棺の通る時には走つて通れ、走らぬと死体は天狗にさらはれる
- 會葬の後内にはいる時盞をふらなければならぬ
- 草履を片方造つて置いて葬式があると捨て、しまへ
- 石碑の字に赤くほつてゐる色が消れてしまつたらあとへ誰かが死ぬ
- 新しい下駄などをはいてお墓参りするな
- 旅行するには寅の日を撰べ
- 丑の日には旅立するな
- 三りんばの日には旅立するな
- 商用に出掛ける時には猿に出會へば引返せ
- 塞りの方へは旅立するな

四、旅行に關するもの

- 葬式に行つて元いつた道を飯つて來ると早く死ぬ
 - 始め水を入れてそれから湯を入れたらねんぎが悪い
 - 長生した人の葬式飯を食すれば長生する
 - 枕をふむと親が死ぬ
 - 葬式のときに水をくんだら悪い
 - 水を吸みに行つて葬式にあつたらその水を内へ持つて歸るな
 - 紐解きの時せすじを縫つてない着物をきると若死する
 - 茶碗にはしを立てると悪い
 - 生花を頭にさすと若死する
 - おくばから二本目のはをぬくと死ぬ
- 七、建築に關するもの
- 三りんぼうの日に棟上げするな 棟上げすると必ず倒壊する
- 鼠を大事にすると交際が廣くなる
 - 猫に蝦を喰はすと腰が抜ける
 - 雨がへるは神様のつかいだといつてころさない
 - がまは錢神様だといつてころさない
 - 黒へびに古草履などをうつけると七日七夜をはへられる
 - 蛇の死がひの骨で足でもつくさ死ぬ
 - 馬のふんをふんだらよくはしる
 - へびの夢を見て三日誰にも言はなかつたならばお金がはいつて來る
 - 三人でしらみをとつたらよけいにわく

- 夜新しい下駄をおろしたらきつねにばかされる
 - 蛇が床下に這入ると金持になる
 - 風のある日にこけたらいたちにくわれる
 - 牛をかつてゐる家には竹をたいたらわるい
 - 商用や集金などに行く時など蛇が上つて行くのを見ると商用や集金が思ふ様になるし下るのを見るとき思ふやうにならない
 - 草木の根を鳥に見せると根がつかない
 - 長い髪の人はいやたいになる
 - 蚯蚓に小便するとチンコが腫れる この時ミミズを洗ふとよい
 - 丙午ひつじの生れ年の女をお嫁にするものでない
 - ハビを殺す時生の杉の枝でたゞくと多くよつて來る
 - 雨降りの日に不具者の眞似をするな
 - 丑の日にお墓参りをするな
 - 夕方ホウヅキを鳴らすと蛇がよつてくる
- 丑の夢をみたら翌朝お宮参りをせよ
 - 蛇の夢をみたら人に言はずに置くこと 内證々々
 - 鱈の目玉を食べると魚の目が出る
 - 蛙や蟹を殺すと勉強にあかんようになる
 - 石でしらみをつぶすと余計にわく
 - 高い所に蜂の巢があるとシケが無い
 - 蓄生の死を見て可愛想だと思つたら祟る
 - 日あたり雨の時は狐の嫁入りがある
 - 鼠がなけば火事がある
 - 山を通るときアブラアゲを持つたら狐につかまれる
 - 人が便所へいつたのをのぞくと鳥になる
 - 血をみてないたら猿になる
 - ねこに長いものを食べさせたらねこが長いものをとつてくる
 - つりざををまたげたら魚がつかれない

九、出生に關するもの

- 二又大根を食ふと双子を生む
- 桶の水に口をつけて飲むと唇の切れた子を生む
- みもちの中（中）に染物をする（中）とあざのある子（中）が出来る
- 嬰兒に鏡を見せるとあとが早く出来る
- 夢に日や月をのむと尊い子（夢）が生れる
- 子供が生れた時に竈の端に及物を置くとわるい
- 女は便所の掃除をする（女）とよい子供を産む
- みもちの時に猫の眼をして長く見てゐると出来た子供は猫の目をしてゐる
- 箒を股いだらお産が重い
- 無名指の一番上の筋よりも子指が短かければ子を産まない
- 畳を掃いた後闕の所でたゞと生まれる子供は鼻が低い
- 身もちの時包を縫ふと出来た子供はふくろに入つてゐる

四三二

- 米をしかける時米を先に釜に入れるとお産は重い
- 生れた時晴であれば死ぬ時は晴である
- 身もちの時杓子にそのまゝ口をつけて呑むとしゃべりの子が生れる
- お産の折り同じ部屋に妊娠の人が來たら子供は生れぬ
- 二人で火を吹けば二子を産む
- 鼻の下にホクロがあると二子を生む

十、勝負に關するもの

- 石塔の角を持つてゐると賭博や賭ごとに勝つ
- 頼母子の時に左足であがると頼母子が落ちる
- 頼母子に行くとき他人の家の土瓶のふたを臍にのせると籤に當る

十一、祈願に關するもの

- 長座の客には下駄に炙をすね、箒を立て、風呂敷

をかぶせておくと客は歸る

- 悪夢を見たら下駄の齒を抜いて川へ流す
- 犬を大切にしたら子が出来る
- 來客を望む時には杓子で招く
- 蛇のぬけがらを財布に入れて置くといつも金がはいつてゐる

いてから出ると恥かしくない

- 大勢の前で大便を催して來た時には額に三度唾をぬる

十二、雜

- 縫針を紛失した時は針を縛つて置け
- 胡瓜を今年になつて始めて食べる前に川へ流すと水におぼれない
- 七夕の朝日の出ぬうちに髪を洗つたらよく落ちる
- 佛様に上げた御飯を食べると憶病がなほる
- 耳の遠い人は孔の明いた石に糸を通して薬師様にまいるとよきこゝねてくること妙
- 葬式の白木綿で水泳用の褌を作ると濡れない
- 水泳に行く時には佛様のご飯を食べて行けば濡れない
- 人の前に出て恥かしがる人は掌に人といふ字を書

- 梅干のたねを船から投げると海は荒れる
- 硯を反對の側からすれば墨を置く時に硯を三度叩いて置かぬと手が下る
- 鏡をまたぐと鏡は曇る
- 潤年には佛のものを買ふな
- 着物の脊筋を縫ふ時は真直に糸を切さらずに縫ふとその子は出世する
- 裸体で便所へ行くとはまる
- 筍へ指さすと筍は腐つてしまふ
- 火事で牛を焼き殺すと七代祟る
- 風呂敷を破ると子供が盗人になる

四三三

- 手の指の間に隙間のある人は兄弟の縁が薄い
- 死んだ人の寫眞は變色する
- 上の齒が抜けたら床下に捨てよ 下の齒が抜けたら家根へ捨てよ
- 大勢の前で大便を催して来た時には 衿を返して三度叩いて置け
- 子の初めて渡河する時には錢を河中に落す
- 猫を殺すと祟がある
- 内庭へは孟宗竹を植ゐるな
- 内庭へは石榴、葡萄、櫻、銀杏を植ゐるな
- 白色(純白)の雞を飼育するな
- たなばた祭の時早朝草葉の露をとつてそれで字を書くと書方が上手になる
- 曉方の夢は正夢である
- 釘を打つのに石をつかふな
- 残り物には福がある
- 眉毛の眼に迫つてはわた人は氣が短かい
- 箸で物をくれた時これを箸で受け取るな
- 悪夢を見た時には裏の南天の木に話してやれ
- 悪夢を見たら枕を返せ
- 神様は東向に祀れ
- 忌明けの日海邊に出て海水で櫛を浸して片びんをとく
- 轉居の時には薬罐を先きにかけて
- 三里へ茨をすわてない人と道連れするな
- 風呂の蓋をあけ放して置くな
- 水汲む人を呼び止めるな
- 若水を迎へる時はもの言ふな
- 大晦日に風呂を入らなかつたら鳥になる
- 髪の毛を多し毛を多くの人に踏まれると髪が長くなる
- 虚言を吐けばウソ齒が生ゐる
- 雷が鳴ると桑原々々と言ふと落ちない
- 茶びんの口を北向にわかしたらわるい

- 夜きものをほしたらわるい
- 眉毛の間が廣かつたら氣が大きい
- 夜きものをおろすとわるい
- てづきをかふると頭が大きくなる
- 家人が死んだときには猫をかきつけておく
- 星をかぞへそのたら皆かぞへなければ死ぬ
- 墓参りして生物や草花をとつてはいけない
- 物のはいつてゐない桶にふたをしてはいけない
- 朝お茶づけするとき茶柱が立つとよい
- 初雷が鳴るとき年越の豆をかむ
- 朝ごんぴが飛べば雨がふる
- きものをかしまいにきたら同じ年の人にはがれる
- 額の廣い人は金持になる
- 二度くしやみをすれば人にくさされてゐる
- 荒神様の花をからしたらお金に不自由する
- 墓場でけがしたらならない
- 大便をしたくなると石三つもつとなほる
- 三人並んで小便したらまん中の人が死ぬ
- 自分の家をまわるものではない
- 部屋を二人でさうじをするな
- 紀州の沖で海坊主が出る
- 苦手の人に蛇が食ひつかない
- 火事の時にその家のむねにこしまきをつると火事がおさまる
- 月夜に提燈をあかすと白髪がはねる
- 扇を拾ふ時左の手でひらふ
- 口の上にはくろろがあれば財産家である
- 夜ねるとき胸元におや指をあてない
- おふろのかまを北向にしてはならん
- 大便の長尻は父母のしに目に會はれない
- 泣き乍ら食事をすると碗から火が出る
- 名前に榮といふのをつけるとよすぎでわるい
- 山でぞうりをひろうた時つばをはきかけてはく
- 新しい着物や下駄で便所にゆくな

- 雷がなるときはだかであるときへそをとられる
- 柿はほつて渡すな
- 商賣人が朝針をつかふともうからない
- 水の夢を見たら火事がある
- 髪を切つて石垣の間に入れて置くとき早く長くなる
- 荒神様の供物をたべるとおしやべになる
- 口の近くにほくろがあるとおしやべり
- 目の下にほくろがあると泣きほくろ
- 古猫は化ける
- 青竹を杖にすれば不吉あり
- 西の日に着物を裁つのがよい
- 紙で製したるものを頭へ被ると悪い
- 籠を頭に被ると脊が高くなる
- つくり立ての着物は一番先に神様へ参る時に着る
- 夜 寝る時に親指を三度噛んで寝ると夢を見ぬ
- 鍋のしりに火がつくと雨だ 月様がかさをかむると雨だ
- 生ぬるい風が吹くと地震がある
- 丑の日の雨は半日 卯辰の雨は巳の日にあがる
- 朝やけがする雨
- 虎の半日雨上る
- 蛙が家に入ると大雨になる
- 子供がさわいだら雨が降る
- てる／＼坊主に酒を吞ますと天気になる
- 三人ならんで小便すると雨になる
- 猫が顔を洗ふと雨になる 蛙が夜ゴト／＼鳴くと雨だよ
- 雷が鳴る時麻の蚊張をつれ
- 鶏が鳴いたら雨になる
- 巳の日と自分の年の日には灸をやかれん
- 秋に財布を買つたら空き財布といつて、かねがはいらぬ
- 便所から歸るとき、こけたら南天の木にさはつてこい

- 寝る時に胸の上に手をのせると恐しい夢を見る
- 柿を拾ふ時は踏んで拾ふ
- かまの上、ナイフをおくと手をきる
- 戸口の闕を踏んだら悪い
- 唇のうすいのはおしやべりである
- 南瓜を半分食べて半分置くときは棒を立つこと
- 御飯を食べる時木の箸と竹の箸で食べてはならぬ
- 帯を着物の裏にしたら悪い
- ものをなくした時に庚申様をしばつておけばよい
- 蝶の飛び舞ふ夢を見たら近き中に變事がある
- 右の目にごみが入ったとき左の頬をなめ、左の目にごみが入った時に右の頬をなめたならば目に入つたごみがとれる
- 餅やダンゴを敷へるものでない
- さげ鍋をとるな
- 水の夢をみたら火に用心せよ
- 一本花をさすもので無い
- 日に向つてナイフのはを見せると悪い
- 訪問の時玄關へ右足から入らない
- 昨夜のお茶を朝になつてから飲むものでない
- 寝言に返事をもらつたら悪い
- 弟が牛の年であつたら本家をのぞむ
- 家の庭へ櫻を植へたり、梨は「無し」と言つて庭に無い方がよい
- 手や足に墨をぬつて寝るとおそはれる
- お年の豆を拾つて食べたらしらみがわく
- ほうき星が出たら戦争が起る
- 子供と同じ年の猫を飼ふものでない
- 舌の長い人は泥棒である
- 手豆が出来た時誰にも告げずに鼻ですると治る

昭和七年十月五日印刷
昭和七年十月二十日發行

和歌山縣東牟婁郡新宮町七七一
編輯兼 和歌山縣東牟婁郡教育會第一部會
發行者 右代表者 植野民平

和歌山縣東牟婁郡新宮町七、六五二
印刷者 尾崎幸次郎

和歌山縣東牟婁郡新宮町七、六八四
印刷所 株式會社 秀英社

發行所 和歌山縣東牟婁郡新宮町七七一
和歌山縣東牟婁郡教育會第一部會

終

